

天にあるものの 写しと影

ヘブル人への手紙講解

TYPES AND SHADOWS
IN THE EPISTLE TO THE HEBREWS

J・ヘディング — 著
JOHN=HEADING

谷下 寛 — 共訳
野城真理



天にあるものの写しと影

—ヘブル人への手紙講解—

J・ヘディング著

へブル人への手紙 目次

序文	五
概論	八
第一章	一二
第二章	五三
第三章	八七
第四章	一〇五
第五章	一二二
第六章	一四一
第七章	一七一
第八章	一九七
第九章	二一三

第十章	一節～十八節	二四九
第十章	十九節～三九節	二六五
第十一章	二九一
第十二章	三四七
第十三章	三七九
訳者あとがき	四一〇

序 文

「へブル人への手紙」のある部分についてはよく語られるが、多くの部分は解釈がむずかしいために無視されている。しかし、この書簡の節、段落、章はばらばらで互いに無関係なのではない。ばらばらに扱えば、この書簡の意図するところを十分に理解できなくなり、節や段落を文脈からはずれて考えることになる。へブル人への手紙では、ローマ人への手紙のように、初めから終わりまで統一がとれ、論理的に結びついた議論が展開されているのである。この議論を真中で切ってしまうと、全体の構造がわからなくなる。

この解説書の目的は、へブル人への手紙の議論がよくわかるようにすることであり、この本の中で旧約聖書を用いるのは、旧約聖書自体に、次の二つのことの種がすでにまかれていることを示すためである。一つは、旧約の儀式はすたれるということ、もう一つは、御子であり、人であり、使徒であり、大祭司であるキリストがおいになつて、旧約の儀式よりさらによいものが与えられるということである。へブル人への手紙の初めから終わりまで、旧約聖書の引用が実にたくさんあるが、それと関連して本書では旧約聖書を十分

に探求する。引用の中に、我々が慣れているものの考え方を越えたような、とても興味深いものがある。しかし、読者がこの書簡を十分に研究すれば、旧約聖書だけでなく、キリストのご本性についてよく知ることができよう。それがもちろん、この書簡の目的である。

この解説書は、私が青年の聖書研究グループを担当し、一年半にわたって一節ずつ学んだとき作ったノートをもとに書いたものである。ヘブル人への手紙の研究は、青年のみならず、他の人々にも有益であると感じ、とくに、この研究グループに参加した学生の中には、休暇期間中やむなく出席できなかった者もいたので、この研究をふつうの文章でまとめ、手ごろな大きさの本にするのがよいと考えた。

本書では、必要があれば、他の訳やギリシャ語訳をとり入れて正確を期したが、私の他の著作に合わせて、基本的には欽定訳を用いた。各種の訳を引用すると混乱を招き、どのようにしてみても、すべての読者の習慣を満足させることはできない。読者には皆それぞれ、自分の好みの訳があるからである。

私の願いは、本書を読んだ方々がキリストをほめたたえるための論証の方法をさらにはつきりとつかみ、力から力へと進み、それぞれの徳を高めるために健全な教えを吸収し、証しと奉仕において向上することである。一つお断りしておくが、この解説書は、楽に読

めるものではない（これは聖書の他の箇所を数多く引用しているためである）。しかし、ヘブル人への手紙そのものも楽に読めるものではない。本書は神を賛美する書でも、神について論じる書でもなく、むしろ解説書であって、実際的である。聖書について仲間どうしで論じあい、よく考える若いクリスチャンにとっても、円熟した御言葉を教える者にとっても有益なように、本書を書いたつもりである。

私がこの本の原稿を書いているとき、御言葉を教える有能な人が、「どの節にも解釈は一つだが、応用は多くある」と教えてくれた。本書はヘブル人への手紙の解釈を与えようとするものである。読者はめいめいこれを応用することができる。

本書は主をあげるためのものであるから、ここに書かれたことを主が祝福して下さい。下さるであろう。

ジョン・ヘディング

へブル人への手紙の概論

主イエスは、人間の心がいかに鈍いものであるかを知っておられた。

「また、だれでも古いぶどう酒を飲んでから、新しいものを望みはしません。『古い物はよい』と言うのです」(ルカ五・三九)。

主と主の弟子たちは儀式にとらわれず自由にふるまったが、パリサイ人やバプテスマのヨハネの弟子たちには、その自由が理解できなかった。その理由が、この節(ルカの福音書だけにある)を読むとわかる。パリサイ人は、律法という古いぶどう酒を飲んでしまい、福音という新しいぶどう酒よりも古いぶどう酒のほうが良いと判断した。この新しいぶどう酒を感謝して本当に飲んだ者だけが、「あなたは良いぶどう酒を、よくも今まで取っておきました」(ヨハネ二・十)と言うことができる。

ガラテヤ人への手紙では、クリスチャンは救いを得るために律法と割礼へ戻ろうとしていた。使徒の働き十五章一節で、すでに始まっていた逆戻りである。へブル人への手紙で

は、律法から離れたことで迫害されるのを防ぐために、信者は律法の儀式に舞い戻りつつあった。儀式に逆戻りすることをただすために神が迫害を許しておられたことを、彼らはほとんど理解していなかったのである（十二章でこのことがわかる）。

栄光の主の御姿を見ることこそ、このような弱さに打ち勝つ方法である。ではそれは、どのようにして得られるのか？ 今日では新約聖書があつて、私たちはそれによつてキリストを十分に知ることが出来る。しかし、この書簡が書かれたときには、神の言葉としては旧約聖書しか存在しなかつた。したがつて、ヘブル人への手紙の著者は旧約聖書のみを引用しなければならなかつた。そして旧約聖書自体が、過ぎ去るべき儀式制度、キリストの栄光と御業、律法をはるかに越えた信仰について、はっきりと語つていることを示したのである。もし今日、私たちが旧約聖書しかもつていないとしたら、どうやつてそのようなことができるだろうか。旧約聖書の細部に及ぶ膨大な知識が不可欠であることは、明らかである。各節の文字どおりの意味だけでなく、霊的な意味についても綿密な研究を行なつて、そのような知識が得られる。旧約聖書自体に、律法や儀式の：これらはもともと旧約聖書の中で立てられたものだが：消滅する素地が含まれていることは、驚くにあたらない。たとえを用いると、卵の中に、毛虫となりやがて蝶となるのに必要なすべてが、もと